

# 比恵遺跡群(16)

—比恵遺跡群第45次発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第402集

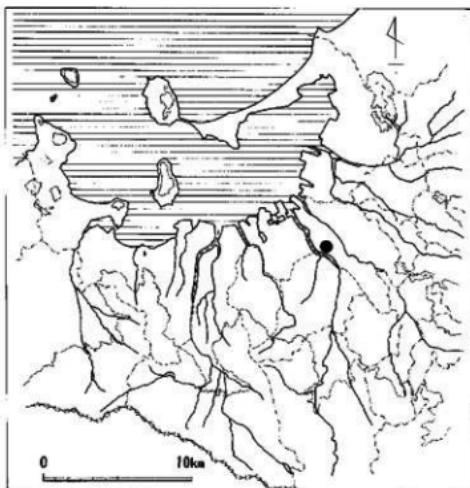
1995

福岡市教育委員会

# 比恵遺跡群(16)

—比恵遺跡群第45次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第402集



遺跡略号 HIE-45  
遺跡調査番号 9237

1995

福岡市教育委員会

## 序

福岡市の陸の玄関口である博多駅の南側には古くから大陸文化流入の先進地として栄えた「奴国」の拠点地域とされる遺跡群が広がっています。今回報告する比恵遺跡はその内の代表的な遺跡であり、近年の再開発に伴い現在までに50次を越える発掘調査が行われ調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は倉庫付事務所建設に伴って実施された第45次調査を報告するものです。当遺跡では第8次調査を始めとして『那の津官家』と推定される遺構が数次にわたって検出されています。今回の調査の結果、『那の津官家』が存続した時期の遺物が多く出土しました。今後それらの資料を検討することによって、『那の津官家』の時代の地域間の交流が明らかになっていくことと思います。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

最後に発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた地権者の高見征義氏、施工の日観建設の方々に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

## 例　言

1. 本書は福岡市博多区博多駅南六丁目における倉庫付事務所建設に伴い、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成4（1992）年に発掘調査を実施した比恵遺跡群第45次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構の実測は担当の福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎の他、星子輝美が、撮影は佐藤があたった。
3. 本書に掲載した遺物の実測・撮影は佐藤があたった。
4. 製図は遺構を藤村佳公思、遺物を佐藤が行った。
5. 本書の執筆・編集は佐藤が行った。
6. 本報告の記録類、出土遺物は、収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

## 目　　次

### 序

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査の組織	1
II	発掘調査の概要	1
III	遺構と遺物	4
1	検出遺構	4
2	出土遺物	6

## 挿図目次

第1図	比恵遺跡群と周辺の遺跡
第2図	比恵遺跡群調査地区位置図
第3図	比恵遺跡群第45次調査遺構配置図
第4図	豎穴住居跡実測図(1)
第5図	豎穴住居跡実測図(2)
第6図	獨立柱建物・井戸(1)実測図
第7図	井戸実測図(2)
第8図	SE01出土土器実測図(1)
第9図	SE01出土土器実測図(2)
第10図	SE01出土土器(3)他出土遺物実測図

## 図版目次

図版 1	1. 比恵遺跡群第45次調査全景（南西から） 2. 比恵遺跡群第45次調査南西側調査区（北西から）
図版 2	1. SB12豎穴住居跡（西から） 2. SB12豎穴住居跡竪（東から） 3. SB13豎穴住居跡（西から） 4. SB13豎穴住居跡内焼土（東から） 5. SE01井戸上層（南西から） 6. SE01井戸（北西から） 7. SE02井戸（北から） 8. SD05溝（北西から）
図版 3	SE01出土土器(1)
図版 4	SE01出土土器(2)他出土遺物

## I はじめに

### 1 調査にいたる経過

1992年5月26日、高見征義氏から本市に対して博多区博多駅南6丁目24-1における倉庫および事務所の建築に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財課であるところの比恵遺跡群の南側に位置し、申請地の西側隣接地には第41次調査地が位置している。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1992年5月28日に試掘調査を実施した。現況は畑で、調査の結果、耕作土直下の地山の鳥栖ローム層上面で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積344m<sup>2</sup>を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなつた。高見征義氏と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は同年9月28日から10月31日まで行われた。

### 2 調査の組織

調査委託 高見征義

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 学

第2係長 塩屋勝利（前任） 第2係長 山崎純男

庶務担当 吉田麻由美（前任） 西田結香

調査担当 試掘調査 荒牧宏行

発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 岩隈史郎・蒲池雅徳・椎藤利雄・篠崎伝三郎・関義種・片野謙藏・田出橋和男・内山和子・江越初代・奥田弘子・関加代子・舎川キチエ・広川道枝・本河富枝・村上エミカ・村上エミ子・萬スミヨ・相川和子・田中ヤス子・藤野邦子・藤村住公恵・星子輝美

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の高見征義氏、施工の株式会社日観建設をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

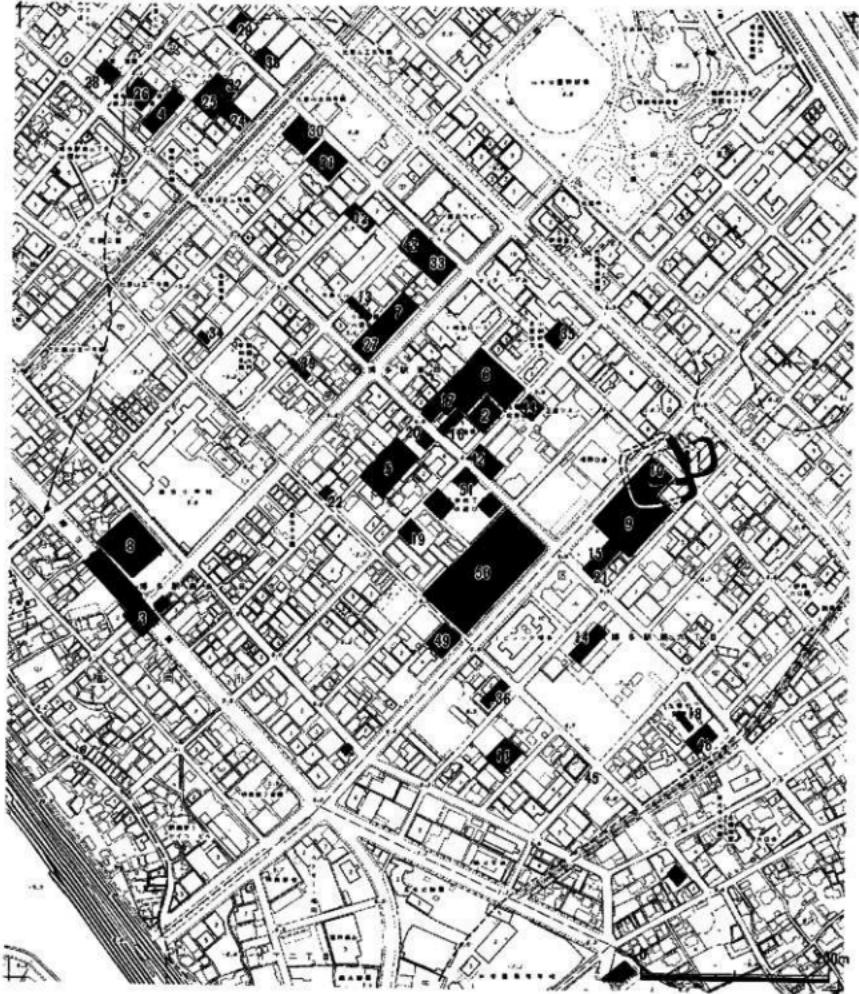
## II 発掘調査の概要

比恵遺跡群第45次調査区は比恵遺跡群の南側中央部分に位置し、標高7mを測る。調査は1992年9月28日にバックホーによる表土剥ぎから始め、耕土は施工業者の協力を得て、調査区域外に搬出した。遺構面は耕作土直下の鳥栖ローム層上面で検出した。調査地現況は畑であったため、ほぼ平坦に削平をうけていた。検出した遺構は竪穴住居跡4棟、掘立柱建物5棟、井戸2基、溝5条、柱穴多数である。遺構と遺物の精査の後、10月22日に全景の写真撮影、その後個別の遺構の写真撮影、遺構実測の作業を経て、10月31日調査が終了した。



- |            |                   |             |             |
|------------|-------------------|-------------|-------------|
| 1. 梓多造跡群   | 6. 比恵遺跡群          | 12. 五十川高木遺跡 | 17. 清政岡本造跡  |
| 2. 福岡城     | 7. 那珂造跡群          | 13. 井尻遺跡群   | 18. 須坂四丁目遺跡 |
| 3. 堅粕造跡群   | 8. 那珂深ツサ遺跡、那珂兼休遺跡 | 14. 曲佐遺跡群   | 19. 赤手遺跡    |
| 4. 吉原本町遺跡群 | 9. 板付遺跡           | 15. 須坂唐刺遺跡  | 20. 三宅庵寺    |
| 5. 古塚造跡群   | 10. 諸岡遺跡          | 16. 須坂水田遺跡  | 21. 野多目遺跡   |
|            | 11. 雀居遺跡          |             | 22. 野多日拾糞遺跡 |

第1図 比恵遺跡群と周辺の遺跡



- |       |              |              |              |              |              |
|-------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 比惠道路群 | 1. 第1次調查地點   | 2. 第2次調查地點   | 3. 第3次調查地點   | 4. 第4次調查地點   | 5. 第5次調查地點   |
|       | 6. 第6次調查地點   | 7. 第7次調查地點   | 8. 第8次調查地點   | 9. 第9次調查地點   | 10. 第10次調查地點 |
|       | 11. 第11次調查地點 | 12. 第12次調查地點 | 13. 第13次調查地點 | 14. 第14次調查地點 | 15. 第15次調查地點 |
|       | 16. 第16次調查地點 | 17. 第17次調查地點 | 18. 第18次調查地點 | 19. 第19次調查地點 | 20. 第20次調查地點 |
|       | 21. 第21次調查地點 | 22. 第22次調查地點 | 23. 第23次調查地點 | 24. 第24次調查地點 | 25. 第25次調查地點 |
|       | 26. 第26次調查地點 | 27. 第27次調查地點 | 28. 第28次調查地點 | 29. 第29次調查地點 | 30. 第30次調查地點 |
|       | 31. 第31次調查地點 | 32. 第32次調查地點 | 33. 第33次調查地點 | 34. 第34次調查地點 | 35. 第35次調查地點 |
|       | 36. 第36次調查地點 | 37. 第37次調查地點 | 38. 第38次調查地點 | 39. 第39次調查地點 | 40. 第40次調查地點 |
|       | 41. 第41次調查地點 | 42. 第42次調查地點 | 43. 第43次調查地點 | 44. 第44次調查地點 | 45. 第45次調查地點 |
|       | 46. 第46次調查地點 | 47. 第47次調查地點 | 48. 第48次調查地點 | 49. 第49次調查地點 | 50. 第50次調查地點 |
|       | 51. 第51次調查地點 |              |              |              |              |

第2圖 比惠道路群調查地區位置圖

### III 遺構と遺物

#### 1 検出遺構

**豊穴住居跡** 調査地は全体的に後世の削平が著しく、住居跡の壁の残りは良くない。住居跡、壁溝の床面より下位の高さまで削平が及び、住穴のみが残っているという場合が調査区域内ではかなりあるであろう。近接する第18次調査で検出された住居跡に近い密度で住居跡群が重複していたであろう。

**SB03** (第4図、図版1) N-40°-Eに主軸の方位をとる平面形が隅丸方形の住居跡である。その大半は調査区外へ延びる。南北の長さ4.1mで、残存する壁の高さは10cmを測る。周囲には幅10cmの壁溝をめぐらす。床面からの壁溝の深さ10cmを測る。建物床面検出の柱穴2個が主柱穴を構成するとみられる。両柱穴間の心々距離2.4mを測る。

**SB04** (第5図、図版1) N-0°30'-Wに主軸の方位をとる平面形が隅丸方形の住居跡である。SD05を切り、SE01・02に切られる。南北長4.5m、東西長4.0m、残存する壁の高さは15cmを測る。床面検出の柱穴の内、Pit23が主柱穴の内の1個とみられる。西側に幅15cm、深さ10cmの壁溝があげていていたが、竈は検出されなかった。

**SB12** (第4図、図版2) ほぼ真北に方位をとる平面隅丸長方形の住居跡である。南東部は調査区外へ延び、南北長6.3m以上で、東西長6.3m、残存する壁の高さは20cmを測る。北東のコーナーに幅25cm、深さ10cmの壁溝があげていて、竈は西側中央に設けられている。白色粘土で構築された竈の基底部は馬蹄状をなし、その中央は赤く焼けている。床面で検出された柱穴の内、Pit178、188、206が主柱穴を構成するとみられる。両柱穴間の心々距離はPit188-Pit178間が3.3m、Pit188-Pit206間が3.5mを測る。

**SB13** (第5図、図版2) ほぼ真北に方位をとる隅丸長方形の住居跡である。後世の削平により西側に幅20cm、深さ10cmの壁溝が残るのみで、壁は全く残っていない。壁溝の南北西のコーナーが残っていることから、南北の長さは、5.7m前後と推測される。西側中央に径30cmの赤く焼けている部位がみられるが、竈やその構築材は確認できなかった。

**掘立柱建物** 建物としてまとめきれない柱穴がかなりある。先に述べたように、床面以下が削平された豊穴住居跡に伴う柱穴がかなりあるであろう。

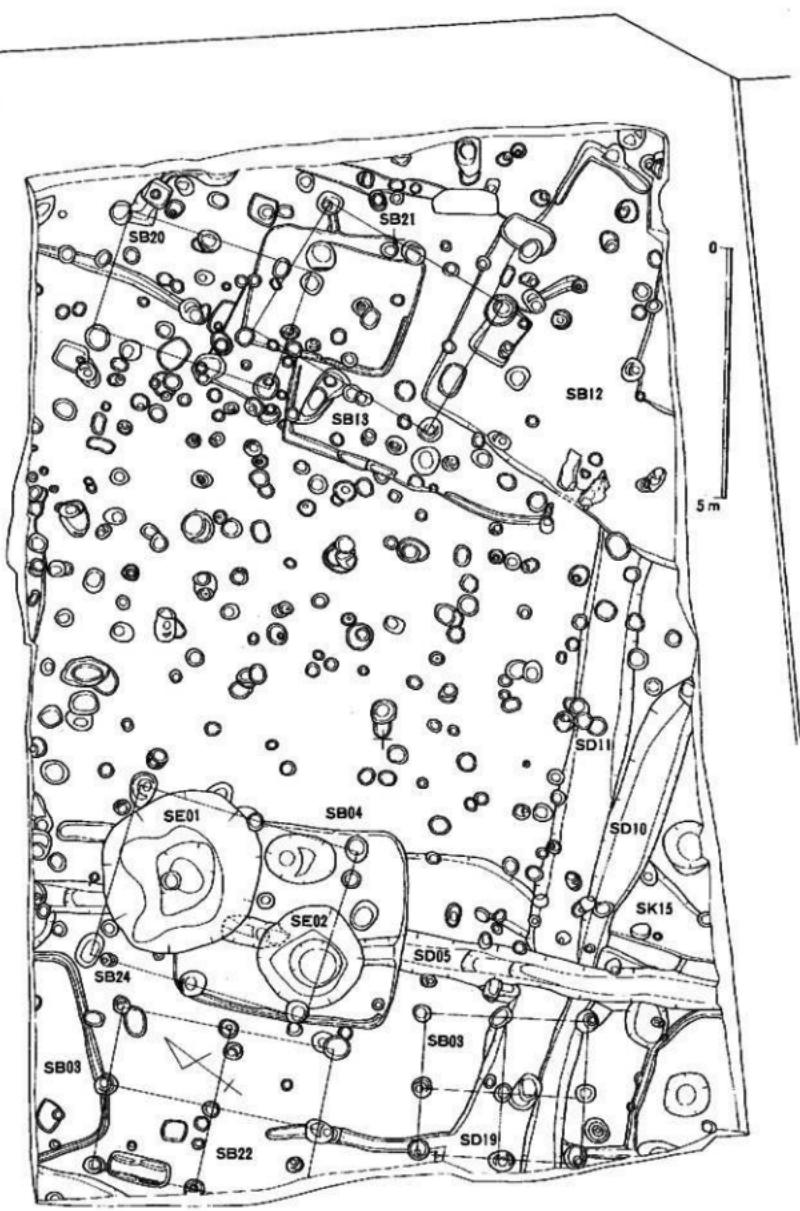
**SB20** (第6図、図版1) 梁間2間、桁行2間の南北棟の建物である。梁間の全長2.5m、桁行の全長4.0mを測る。柱穴は円形で、径30~50cm、深さ20~25cmを測る。方位はN-20°-Wにとる。

**SB21** (第6図、図版1) 梁間2間、桁行2間の南北棟である。梁間全長3.0m、桁行全長4.1mを測る。柱穴は円形もしくは小判形で、径35~65cm、深さ20~45cmを測る。方位はほぼ真北にとる。

**SB22** (第6図、図版1) 梁間2間、桁行2間の南北方向にやや長い総柱建物である。梁間の全長3.3m、桁行の全長4.4mを測る。柱穴は円形で、径35~50cm、深さ50~80cmを測る。建物を構成する柱穴の内、南側に想定される1個は調査区外で、未検出である。方位はN-20°-Wにとる。

**SB23** (第6図、図版1) 梁間2間、桁行2間の同じく南北にやや長い総柱建物である。梁間の全長2.9m、桁行の全長3.5mを測る。柱穴は円形で、径35~50cm、深さ40~55cmを測る。方位はN-30°-Wにとる。

**SB24** (第6図、図版1) 梁間方向がそれぞれ井戸と重複しているが、元々は他の建物と同様2間であろう。桁行は2間の南北棟の建物で、梁間の全長3.6m、桁行の全長4.6mを測る。柱穴は円形もしくは小判形で、径30~75cm、深さ60~75cmを測る。方位はN-20°-Wにとる。



第3図 北海遺跡群第45次調査遺構配置図

## 井戸

**SE01** (第7図、図版2) 平面形は円形を呈し、直径3.2~3.5mを測る。底面は八女粘土層まで掘り下げられている。深さ2.5m、底面の標高5.2mを測る。素掘りの井戸であったのだろうか、井戸枠やその痕跡、井戸枠を抜き取った形跡は土層から観察できなかった。埋土中から土師器、須恵器が収納用コンテナ5箱出土した。底面からは完形の須恵器杯身(第8図15)、土師器甕(第9図48)が出土し、さらに甕の中には桃種が入っていた。SB04・SD05を切る。

**SE02** (第6図、図版2) 平面形は円形を呈し、直径2.0~2.1mを測る。底面は八女粘土層まで掘り下げられている。深さ2.0m、底面の標高5.6mを測る。SB04・SD05を切る。

## 溝

**SD05** (第3図、図版2) 調査区の西側を南北に走る。残存する上面幅60cm、深さ30cm、底面幅40cmの断面逆台形の溝である。

**SD11** (第3図、図版1) 調査区の南側を東西に走る。残存する上面幅120cm、深さ10cm、底面幅80cmの断面逆台形の溝である。

## 2 出土遺物

### SE01出土土器 (第8~10、図版3・4)

#### 須恵器

杯蓋 (1~11) 口径12.4~14.2cm、器高3.6~4.6cmを測る。天井部と口縁部の境に段、沈線はなく、丸くつくられ、口縁端部は丸くおさめられる。10は口縁端部内面に段がつく。1・7は口縁端部でわずかに外反するが、焼き歪みによるものであろう。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。

杯身 (12~28) 立ち上がりの高さは0.6~1.2cmを測り、基部から短く内傾する。28は立ち上がりと受け部の境が不明瞭である。口径10.8~12.8cm、器高3.6~4.8cm、受け部径13.8~15.2cmを測る。外底部は21が手持ちヘラ削りされる他は、回転ヘラ削りで、内底部がナデ、その他の部位は横ナデが施される。

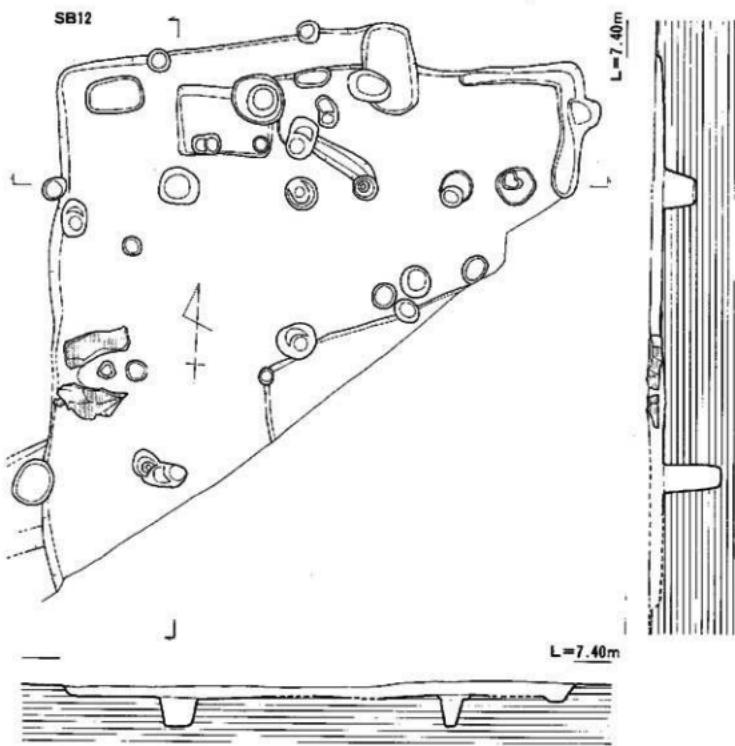
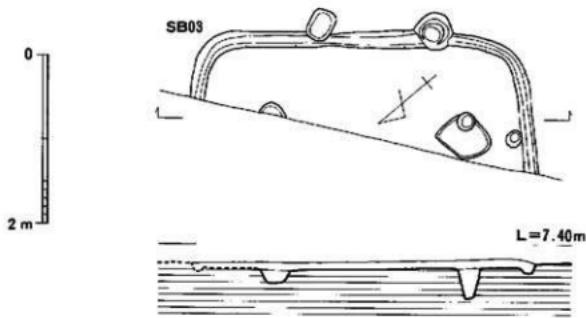
29~31は瓦質に焼成され、器内は一般の須恵器に比べると厚く、端部のつくりに鋭さを欠く。杯蓋 (29) は口径13.2cm、器高4.3cmを測る。杯身 (30・31) は立ち上がりの高さ0.8~0.9cm、口径11.7~12.6cm、器高4.5~3.9cm、受け部径13.8~15.0cmを測る。

高杯蓋 (32~34) 杯蓋と同様な器形の特徴を示し、天井部に中心が窪んだボタン状のつまみがつく。天井部外面は32・34が回転ヘラ削り、33がカキ目が施される。内面は32・33がナデ、34には当て具痕が残る。その他の部位はいずれも横ナデが施される。口径13.5~15.8cm、器高4.4~5.8cm、つまみ径3.1~3.6cmを測る。

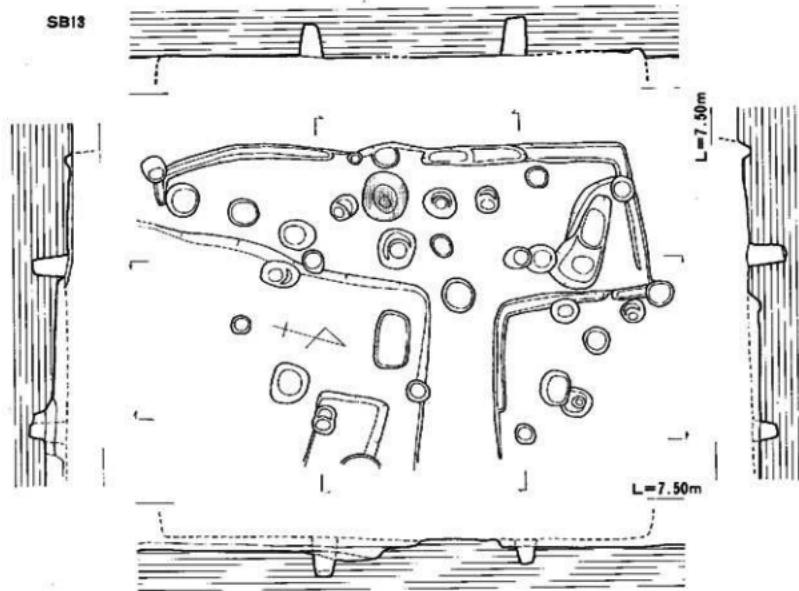
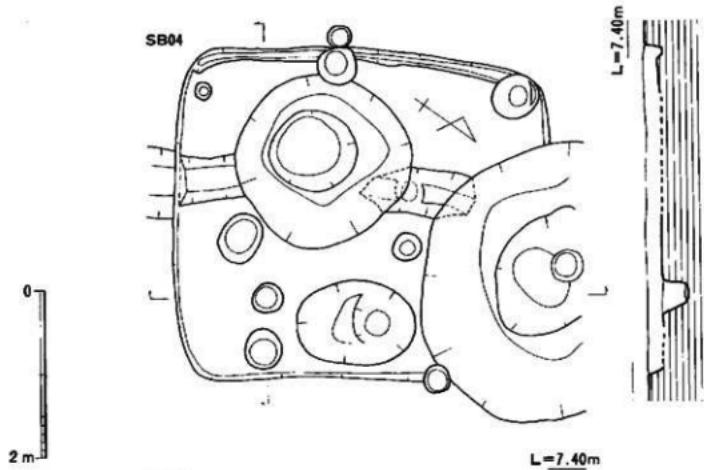
有蓋高杯身 (35) 杯身と同様な器形の特徴を示す。脚部が消失している。杯部の立ち上がりの高さ0.7cm、口径11.0cm、受け部径13.4cmを測る。杯00も外底部の形状から高杯の杯部とした方が妥当かも知れない。

椀 (36・37) 口縁部でやや内側へ窄まり、体部は36が内湾気味に、37は直線的に立ち上がり、凹線4条と斜位の連続する刻み目による文様帯をもつ。やや丸底の底部は回転ヘラ削り、その他の部位は回転横ナデが施される。

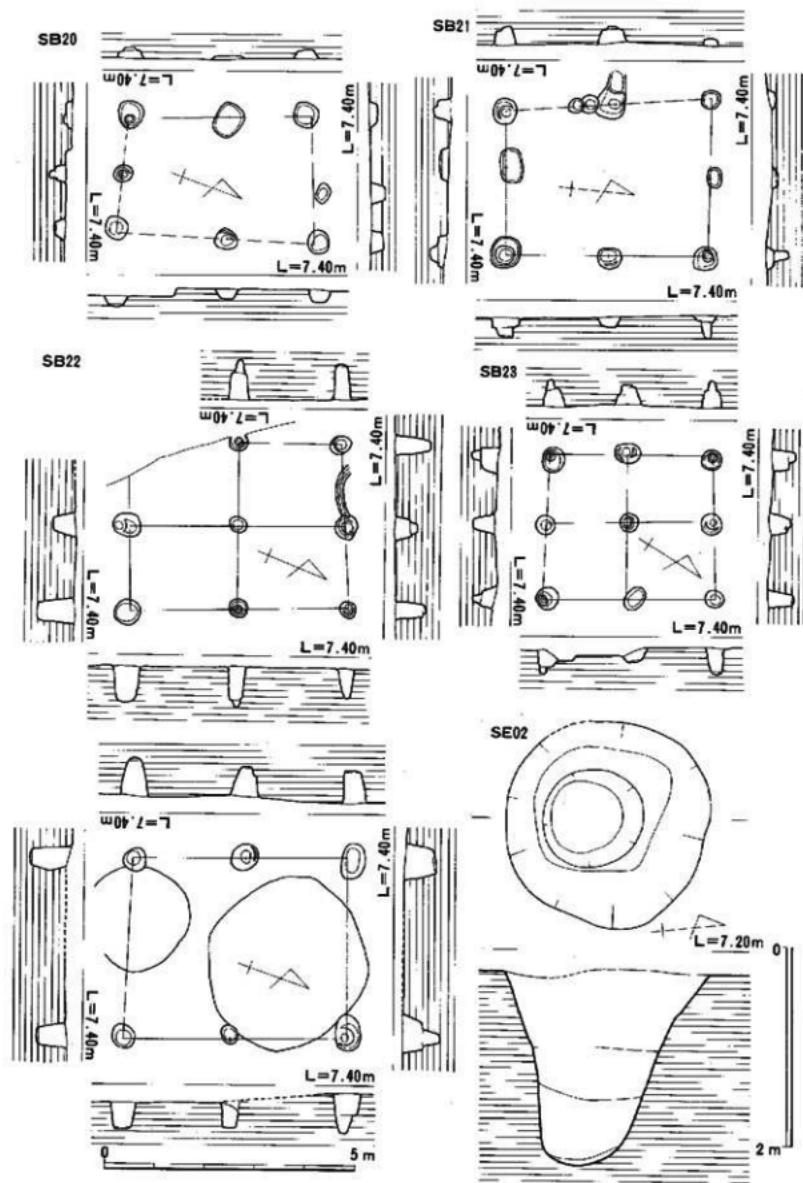
短頸壺 (38・39) 頸部から口縁部が38は直立、39は内傾する。38の口縁端部内面には段がつく。いずれも内底がナデ、体部外面下半が回転ヘラ削りされる。38の体部外面上半から体部内面にかけて



第4図 堪穴住居跡実測図(1)



第5図 積穴住居跡実測図(2)



第6図 摺立柱建物・井戸(I)実測図

回転横ナデが施される。39の体部外面上半はカキ目、口縁部から体部内面にかけて回転横ナデが施される。

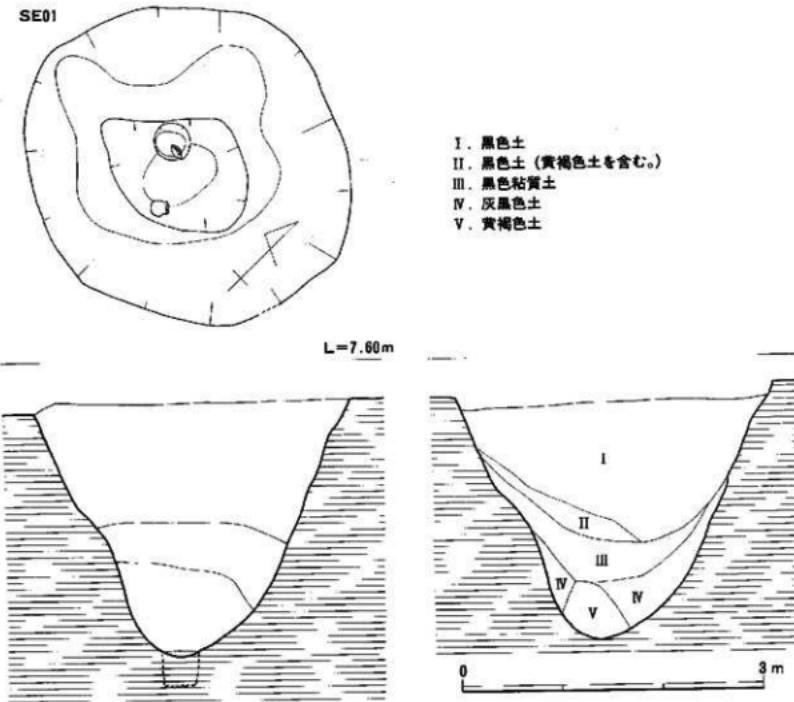
蓋(40) 口縁端部を肥厚させ、浅い凹線をめぐらせる。肩部にはカキ目、その他の部位は回転横ナデが施される。

蓋(41) 身部の器種は不明。天井部に中心が窪んだボタン状のつまみがつく。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデが施される。口縁端部は外面へ肥厚する。

趾(42) 二重の口縁部片で、局曲部の内側に断面三角形の突帯がめぐる。

#### 土師器

高杯(43・44・50) 43・44の焼成は土師質であるが、成形、調整は須恵器の技法が用いられている。43は口縁部と体部の境ではなく、丸くつくられ、口縁端部は丸くおさめられる。須恵器杯蓋と同様な器形の特徴を示す。杯部の口縁部は内外面とも回転横ナデ、下半は回転ヘラ削り、内底はナデを施す。脚部は内外面とも回転横ナデで、裾端部は外上方に肥厚する。胎土は明赤褐色で、器表には赤色顔料が塗布されている。44は脚部のみの資料で、外面には絞り模様が明瞭にみられる。50は杯部のみの資料で、杯部下位で屈曲し、稜線がつく。口縁部は大きく外反する。全体的に器表の剥離が著しいが、ヘラ磨きが施されていたとみられる。



第7図 井戸実測図(2)

甕 (45・48・51) 口径部は欠失。胴部外面上位はカキ目、中位以下は叩きの後縦方向の刷毛目を施す。内面は上位が横ナデ、中位以下はナデを施す。48の口縁部は丸みをもってくの字に外反する。口径より胴部最大径が大きく、胴部は球形を呈し、底部は不完全な平底である。口縁部外面が横ナデ、内面は横方向の刷毛目、胴部外面は縦方向の刷毛目、内面の口縁部近くは横方向のヘラ削り、その他の部位は縦方向のヘラ削りを施す。51の口縁部は丸く外反し、内面の綾は不明瞭である。口径より胴部最大径が大きい。胴部下半が欠失しているが、長胴形を呈すると推察される。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は縦方向の刷毛目、内面の口縁部近くは横方向のヘラ削り、その他の部位は縦方向のヘラ削りを施す。

壺 (46・47) 口径より胴部最大径がやや大きく、胴部は球形を呈する。口縁部は直線的に立ち上がり、端部下で46はやや内側に窄まり、47はやや開く。

鉢 (49) やや内湾する口縁部下で削出し、内面には棱がつく。全体的に器表の剥離が著しいが、ヘラ磨きが施されていたとみられる。

#### SK04出土土器 (第10図、図版4)

土師器 いずれも器表が著しく磨滅しており、調整を観察することはできなかった。

壺 (52) 直立気味に立ち上がる二重口縁をもつ。

甕 (53) 球形の胴部に内湾する口縁部がつき、端部は上方につまみ上げられている。

鉢 (54) 丸底の鉢で、口縁部は細くおさめられている。

#### SK15出土土器 (第10図、図版4)

須恵器杯 (55) 口径10.2cm、器高5.0cmを測る。立ち上がりは高さ14mmを削り、基部から直線的に内傾する。口縁端部内面に段がつく。底部は回転ヘラ削りし、その他の部位は横ナデを施す。

土師器 器表が著しく磨滅しているが、56の内面にヘラ磨きの痕がみられる。

杯 (56~58) 内湾する体部から56は口縁部が短く開き、57・58は口縁端部が内傾する。胎土はいずれも赤褐色を呈し、56の器表には赤色顔料が塗布されている。

高杯 (59) 杯57・58と同様な器形の特徴を示す杯部に、裾端部を細くおさめた脚部がつく。器表には赤色顔料が塗布されている。

#### その他の遺構出土土器

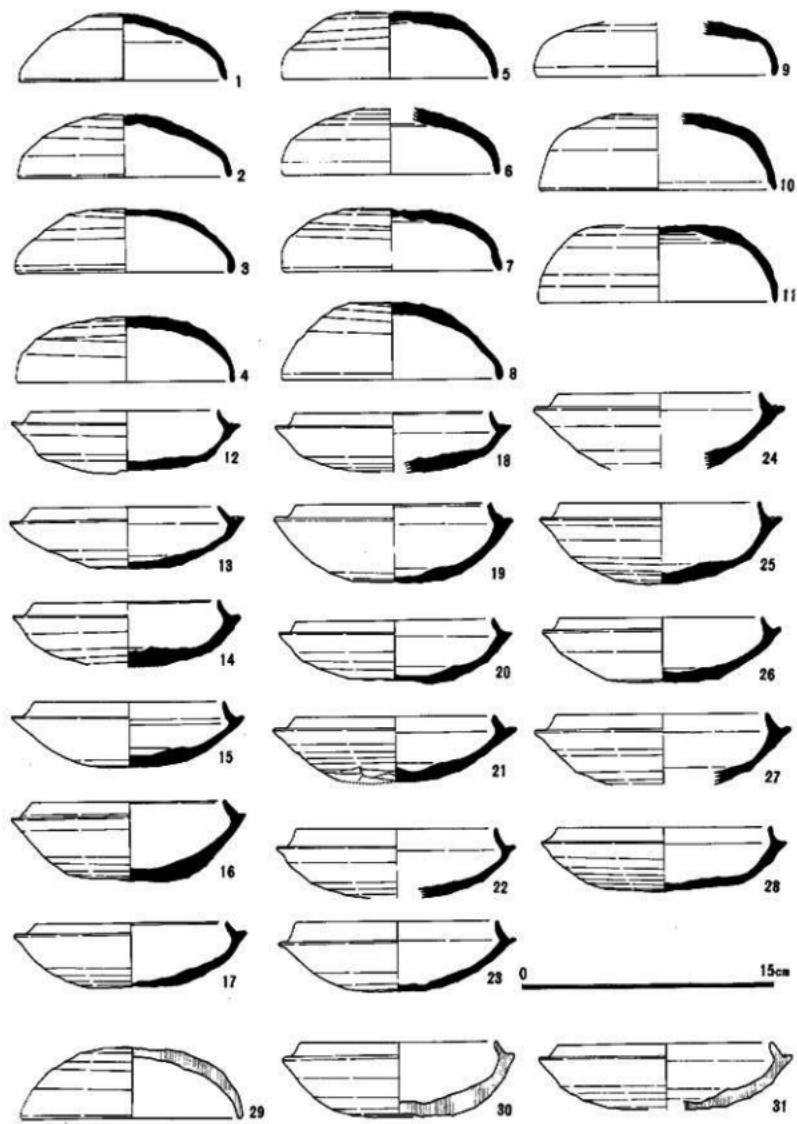
須恵器杯蓋 (60) 天井部と口縁部の境は不明瞭で、丸くつくられ、端部は丸くおさめられる。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ、その他の部位は横ナデを施す。口径11.0cm、器高3.7cmを測る。SD10出土。

須恵器杯 (61) 底部と体部の境に棱がつき、断面四角形の高台が底端部よりやや内側につく。調整は体部が回転横ナデ、内底部はナデ、外底部は回転ヘラによって切り離されている。Pit185出土。

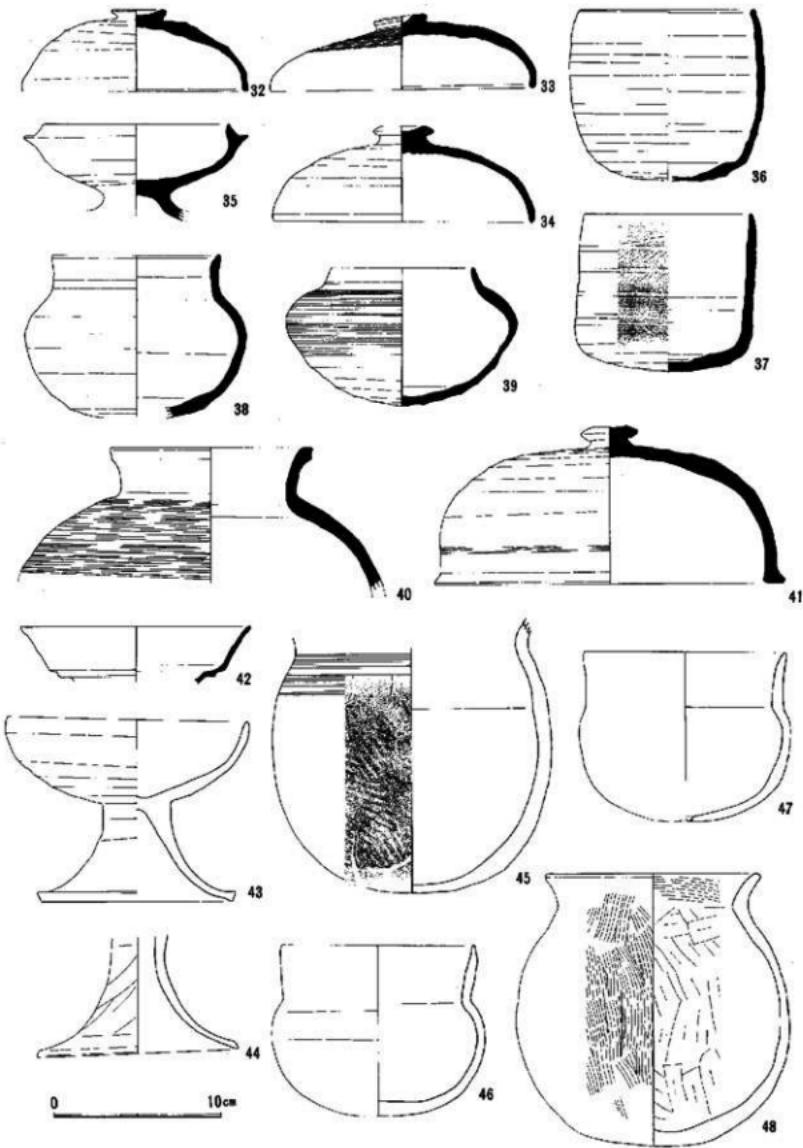
土師器杯 (62) 内湾する体部からのびる口縁端部は内傾する。器表には赤色顔料が塗布されている。Pit167出土。

玉類 (63~70・72・73) 63~69はSB13、70はSD11、72はSE01、73はSK08、74はPit78、75はPit11からの出土である。63は滑石製勾玉、64~67・74は滑石製白玉、68・75はガラス製小玉、69はガラス製丸玉、70は碧玉製管玉、72・73は土製丸玉である。

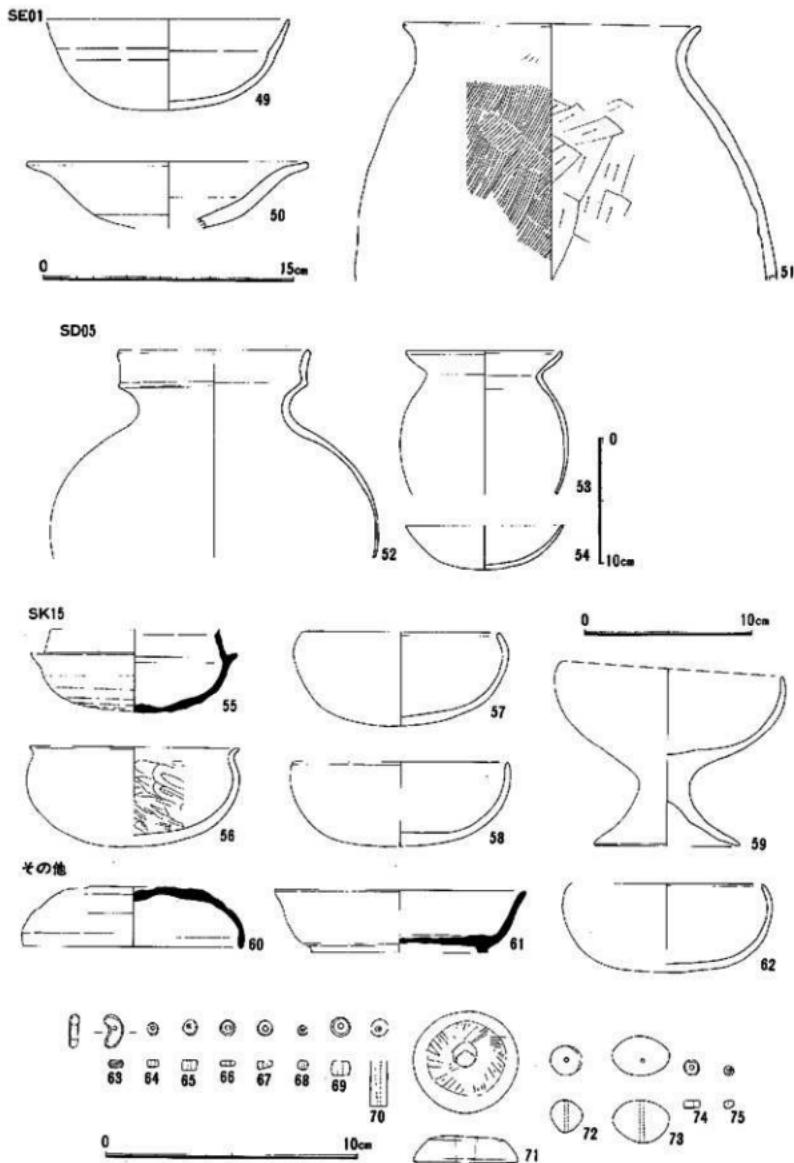
滑石紡錘車 (71) 高さ1.0cm、上径3.0cm、下径1.2cmの截頭円錐形の紡錘車である。上面に放射状の線刻が施されている。SB12出土。



第8図 SE01出土土器実測図(I)



第9図 SED1出土土器実測図(2)



第10図 SED1出土土器(3)他出土遺物実測図

# 図 版

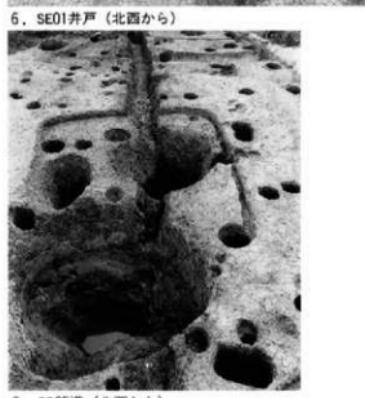
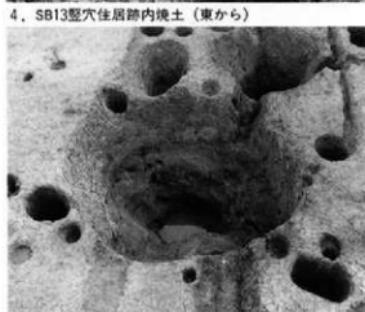
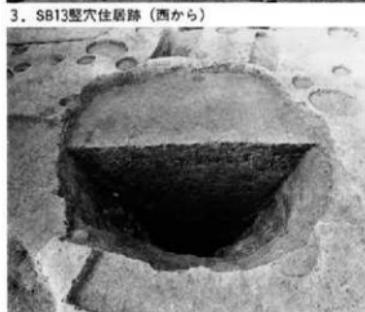
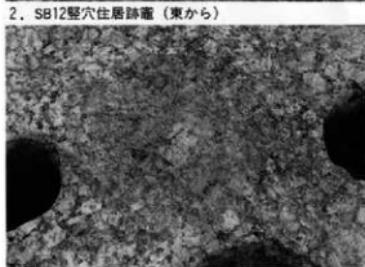
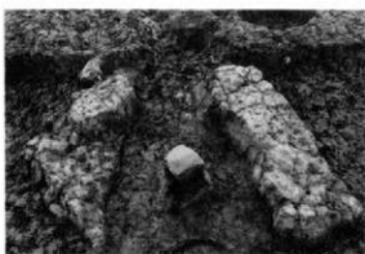


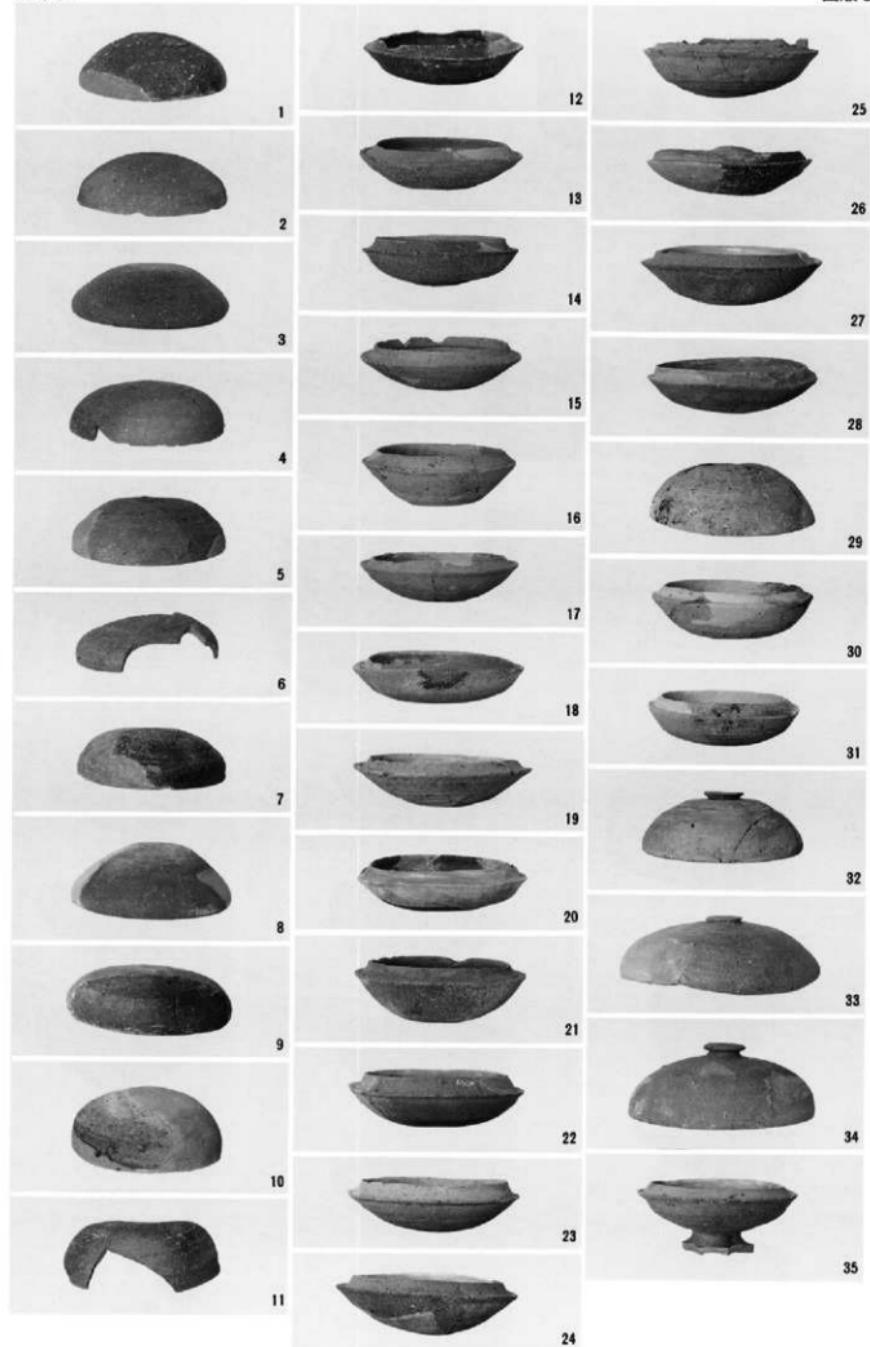
1. 比恵遺跡群第45次調査全景（南西から）



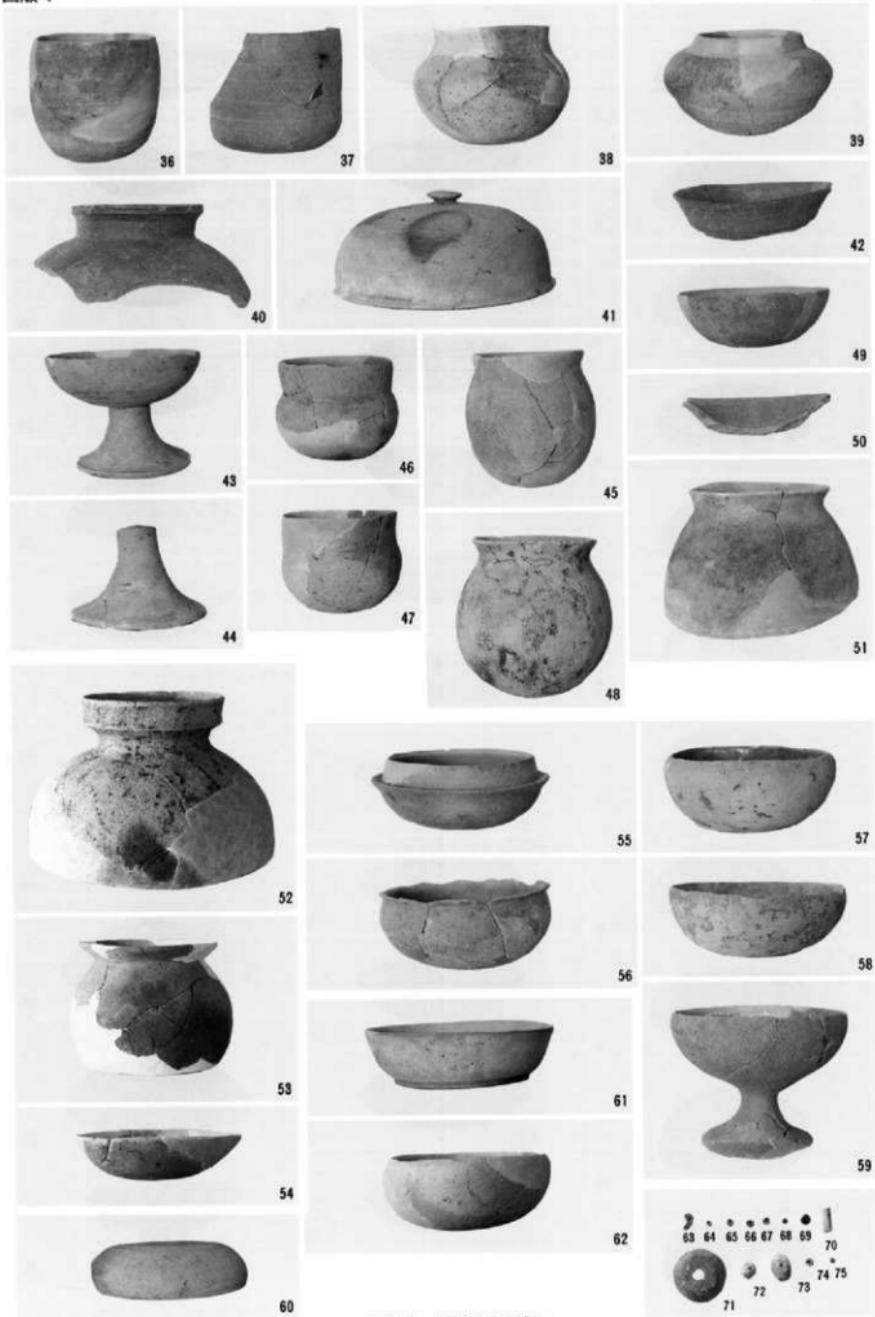
2. 比恵遺跡群第45次調査南西側調査区（北西から）

図版 2

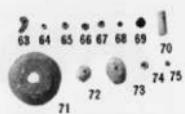




SE01出土土器(1)



SE01出土土器(2)他出土遺物



---

## 比恵遺跡群(16)

—比恵遺跡群第45次発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第402集

1995. 3. 31

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 大野印刷株式会社

福岡市博多区桜田2丁目2-65

---